

二〇一七年度 入学試験問題

経済学部A方式I日程・社会学部A方式I日程・現代福祉学部A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

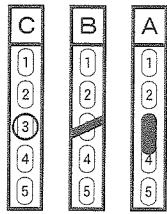
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。



(一) 正しいマークの例

(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

人はたしかにさまざまな価値を求めねばならない。ある価値をたて、それに合わぬものを裁き、つねにさらに高い価値を求め、世界を分割し、分類し、そうやって理解し対応しうるものとし、秩序を見いだし、人びとの間にも序列と階層と秩序を造り―それらがかがやかしい人間の理性の業績である。ギリシアの文化には、そのようなホウトを⁽¹⁾はじめて見いだし、探求する人びとのみずみずしい感激があつて、私たちをこよなくひきつける。しかし、それらがひとたび固定し、絶対化してくると、それは人の生命を圧迫しはじめ。そこにはいつも逆方向のせめぎ合いがある。知は流動する現実のうちに真実を捉え、明瞭に固定することを求め、秩序は人びとの間の争いや非効率な動きを、統一と安全と生産へと形づくる。それは偉大な業績である。しかし、⁽²⁾シヨセン人の見いだしたものにすぎないそれらの真実や秩序につきまとう見落としと欠陥は、つねに声をあげて叫び続ける。

I あらゆるカテゴリー、価値基準、階層、能力、貧富などを度外視した、人のうちの核のようなもの、個人がかげがえない個人として存在するその場所にこそ光をあてることを説く教えが意味を持つのは、そういう場においてである。それは、より本質的なものを生かすために、文化と秩序の所産すべてを疑問視する。ヨーロッパの初期の歴史の中で、その役目を果たしてきたのはやはりキリスト教であつた。⁽¹⁾そのインパクトは、既成のキリスト教自身を破壊するものとして、後代に伝えられた。

II 歴史の中で、制度となつたキリスト教の流した害悪は大きい。とくに、被害者であつたヨーロッパ外の世界の一人員としての私たちにはそれがよく見える。ヨーロッパ内部でも正統と制度を守ろうと必死であつた教会のイタン⁽³⁾狩り、魔女狩りの犠牲者の数は多いし、そこまで行かなくとも、硬化した制度の抑圧に苦しんだ人びとは数知れないと思う。近世にはいつて非ヨーロッパ世界と接触したヨーロッパが、キリスト教の名のもとに、どれだけ抑圧と支配と搾取を進め、ときには掠奪、虐殺にまで至つたかは、私たちには忘れることのできないことである。また、ヨーロッパの法律が、十九世紀半ばに至るまで

キリスト教徒でない住人、とくにユダヤ人を公然と差別・抑圧し続けたことを見れば、キリスト教が一方ではフランス革命の人権思想を準備する要素と共に、他方では、ヒトラーを準備する要素をも含んでいたことは明白である。

しかし、それはあらゆる硬化した制度と思想の陥る運命でもあろう。キリスト教は思想として、制度として自らを固定しながらも、たび重なる改革の動きによって、ある程度その生命を延長することができた。むしろそれは驚くべき長命の制度・思想だったと言えるだろう。それはその思想と制度の中で、腐敗とコカッ⁽⁴⁾への監視の精神と機構が、ある程度機能していたから可能だったのである。しかしそれにも限界があった。どのような思想や動機であっても、それが固定した権力機構のかたちをとって長い間支配すれば、必ず盲目になり、腐敗し、抑圧する。私たちにできることは、つねに権力が固定しないように監視できる、心と制度を保持しておくことだけであろう。一神教の一種であるキリスト教は、思想形態としても、たしかに権力を集中させやすいかたちを持っていた。それが安定と長命の原因でもあったし、恐るべき抑圧の原因ともなった。

Ⅲ あらゆる制度化・概念化によって見るかげもなくされながらも、他方では逆にその概念化・制度化によって守られもして、原始のキリスト教のインパクトは、さまざまな仕方で生きながらえているように思える。近代のはじめ、教会制度や因襲やスコラ哲学に叛旗^{はなき}をひるがえさせた原動力もまた、実は深くキリスト教的なものではなかつたらうか。西欧近代の一つのスローガンでもある、個の尊厳と人権の思想は、まさにキリスト教がある面では古代を補い、ある面では反撃しながら明確化したものだった。近代はそれを用いて、制度化したキリスト教自体、また硬化したキリスト教的思想体系自体を破壊し、また総じてあらゆる社会的・思想的疎外に対して戦う武器としたのだ。それは現在でもそのような武器としての有効性をまったく失ってはいない。

Ⅳ イエスの教えは、^{注1}バフチーンをひきあいに出すまでもなく、とりよようによつてはきわめて破壊的な面を持つ。何のレットルもない人としての人への愛を救おうとすれば、多くのものを壊さなければならぬ。イエスの説いた隣にいる人への愛は、律法や知恵を鋭く批判するものだった。キリスト教を「学説」にし、「制度」にするとすることは、それ自体かなり矛盾した仕事であった。しかし文化と社会の中で存続するためには、自己を主張するためには、それらを取り入れることも、危険

だが必要でもあった。初期のキリスト教の形成にあたった指導者たちにとって、何世紀の間、「福音」、つまりイエスのよきおとずれ、と「文化」、つまりギリシアの人びとがパイディアと呼んだ、人びとの文化的・社会的教化に必要な学芸との関係をどう考えるかが、大きな問題であった。

V この問題を何度でも再燃させるのは、イエスの教え自体のうちにある文化への批判性、破壊性である。それはまた、あらゆる宗教の中にある要素だろう。このような破壊性は、仏教ではめだつて前面に出てきている。絶対なものは、空、無などと好んで否定的な表現で語られるし、禅の語録に有名な「師を殺し、仏を殺し」というような表現に、その精神は少々どぎつく、しかしはつきりと現われている。しかし、イエスの教えは、愛ということばを使うゆえか、それよりは優しく、どこまでも「人」の姿を積極的なものとして残す。仏教風に言えばそれは人間中心性、**ア**の残る不徹底な思想だろうし、事実、その人間中心性が人間主義のゴウマンへとつながることもあったろう。とくにその「人間」が、白人種やヨーロッパ人や「正統キリスト教徒」だけを意味すると考えられたりする場合、この思想のもたらす害悪と残虐は、極端なものとなりえた。

VI しかしもちろんイエスの説いた「愛」は、抽象的とも言えるほど純化されたもので、本来はそのような差別化にこそ対立するものだったことは、上に述べたとおりである。あらゆる属性を相対化する愛であるならば、それはほとんど人間と他のものの差をも相対化する。「山川草木悉有仏性」と言われるのに近い、「存在への愛」としか言えないような**イ**ものであるだろう。それは友愛や、恋愛や、親子の愛とは大きなへだたりのある、仏教の「無」にも通ずる、いわば冷たい愛だと言えるかもしれない。

しかし、キリスト教はどこまでも「愛」という語を捨てない。ということは、そこに、あらゆる人間の属性を超えた根底に、「関係性」が浮き上がってくるということではないだろうか。たとえ手足をも、いわゆる「理性」をもたない人間であろうとも、そこには、愛し愛されるという、関わり合うという、可能性だけは前提されているわけである。「人間」の核心として、このような「関わり合う能力」を置く思想は、やはり深い洞察を含む思想であると思われる。どのような心身の障害をもつ人であろうと、ある「関わりをもつ能力」をもっており、それがふれあうに困難な表面の下に見えるとき、私たちにどんなに深い喜びを与

えるかということとは、そういう人たちと接する者が日々体験することである。

関係性を存在の根底に置く考えは、仏教の思想の中心にもある。すべての存在は縁起の法の結節点であって、実体はなく、我もなく、他もないというのがその思想の基本であろう。しかし、キリスト教は、けっして我や他者を消しつくすことはなく、さらにそこで愛という語を使い続け、いかに遠いといつても、友愛や親子の愛や、恋愛とのアナロジーを否定しなかった。そしてイエスという、「典型的に愛する人」の具体的なおもかげを、教えの中心から消し去ることをも、けっして

ウ。

おそらくそれが、キリスト教に対する人びとの評価を分けるところだろう。私は個人的には、この思想を、その多くの欠点や危険にもかかわらず、好んでいる。人は結局、人をもっとも近く感じ、もっとも関心を持ち、もっとも愛するものであり、人との関わりを他のものとの関わりに先行するものと捉えることは正しいことのように思えるからだ。冷徹なスコラ哲学の鉄のような体系の中心に、そして恐るべき階級組織を持つ教会の中心に、ひいては近代のさまざまな抽象化する学の根底にも、このすべてを相対化する生身の具体的な「愛する人」が座っていることは、^④逆説でもあり、救いのようにでもあり、悲劇のようでもある。しかし、ヨーロッパ・キリスト教世界の人びとは、中世・近代・現代を問わずどこかでそのことを意識している場合が多い。そして、そのようなあらゆる文明・文化の産物を相対化する意識は、人間にとって好ましいものであると思われる。その相対化する意識の中心をなすのは、イエスであり、彼の説く隣人への愛であり、隣人としての人である。そしてそれがもう一段抽象化されたものが、「個としての存在」の概念であると思われる。

〔坂口ふみ「個」の誕生―キリスト教教理をつくった人びと〕より。ただし原文の一部を変更した。

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナにふさわしい漢字を、つぎの各群のa～hの中からそれぞれ二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) | ホウト | a | 法 | b | 邦 | c | 胞 | d | 方 | e | 徒 | f | 途 | g | 土 | h | 戸 |
| (2) | シヨセン | a | 諸 | b | 処 | c | 初 | d | 所 | e | 千 | f | 線 | g | 詮 | h | 戦 |
| (3) | イタン | a | 意 | b | 伊 | c | 位 | d | 異 | e | 端 | f | 譚 | g | 嘆 | h | 短 |
| (4) | コカツ | a | 固 | b | 孤 | c | 仔 | d | 枯 | e | 克 | f | 活 | g | 恰 | h | 渴 |
| (5) | ゴウマン | a | 号 | b | 豪 | c | 傲 | d | 剛 | e | 満 | f | 漫 | g | 慢 | h | 万 |

問二 本文中の空欄 に入る最も適切なものを、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|---------|---|---------|---|---------|---|--------|---|--------|
| ア | 1 | 具象性 | 2 | 絶対性 | 3 | 宗教性 | 4 | 本態性 | 5 | 擬人性 |
| イ | 1 | 個別的な | 2 | 無慈悲な | 3 | 透明な | 4 | 暖かな | 5 | 亭々とした |
| ウ | 1 | いとわなかった | 2 | 拒否しなかった | 3 | ぬぐえなかった | 4 | 論じなかった | 5 | 許さなかった |

問三 「しかし、思想・制度となったキリスト教の否定的な面に目を奪われることは、キリスト教を盲目的に讚美することと同様に、ヨーロッパ文化への理解を歪めるのではないだろうか。」という文章は本文中の のどの部分に入ることが最も適切であるか。該当する番号を一つ選び解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|--------------------------------|---|---------------------------------|---|----------------------------------|---|---------------------------------|---|--------------------------------|---|---------------------------------|
| 1 | <input type="text" value="I"/> | 2 | <input type="text" value="II"/> | 3 | <input type="text" value="III"/> | 4 | <input type="text" value="IV"/> | 5 | <input type="text" value="V"/> | 6 | <input type="text" value="VI"/> |
|---|--------------------------------|---|---------------------------------|---|----------------------------------|---|---------------------------------|---|--------------------------------|---|---------------------------------|

問四

傍線部①の「そのインパクトは、既成のキリスト教自身を破壊するものとして、後代に伝えられた。」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 人間の本質的なものを生かすために、キリスト教はみずからをも破壊する可能性を秘めた制度化の力を備えた形で後代に伝えられていった。
- 2 かけがえない個人というものに焦点をあてるキリスト教の教えは、文化や社会制度に他ならないキリスト教自身をも破壊する可能性を含みながら後代へと伝えられた。
- 3 かけがえない個人としての存在に光を当てることで、キリスト教はみずからを破壊する理性の力を内に秘めた形で後代に伝えられていった。
- 4 あらゆるカテゴリーや価値基準を度外視するキリスト教のインパクトは、既成のキリスト教を破壊することですますます力を蓄え、文化として後代に伝えられていった。
- 5 かけがえない個人としての存在に光を当てるキリスト教の教えは、イエスの存在自体を疑問視する危険性を孕みつつ後代へと伝えられていった。

問五 傍線部②の「文化と社会の中で存続するためには、自己を主張するためには、それらを取り入れることも、危険だが必要でもあった。」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 キリスト教の隣人愛の教えがもつ破壊的な側面を緩和するためには、制度や学説のもつ力を借りてその危険性を減らした形で自己主張していくことが必要であった。
- 2 西洋の文化と社会の中でキリスト教が存続し自己主張していくためには、隣人愛というものを取り入れる危険性を減らしておくかす必要があった。
- 3 キリストの隣人愛の教えを制度化することは自己矛盾した仕事であるが、その危険をおかすことによって、キリスト教の教えは一層純化されて社会の中で自己主張が出来るようになった。
- 4 キリストの隣人愛の教えを制度化し学説とすることは、自己矛盾した仕事であるが、そうした矛盾を乗り越える力を持つことでキリスト教は制度としての危険性が減り、社会の中で自己主張していくことが可能になった。
- 5 キリスト教を制度化するということは、そもそもそれを批判したイエスの隣人愛の本質と矛盾するが、イエスの教えを後代の西洋社会に文化として伝えるためにはそうした危険を敢えておくかす必要があった。

問六 傍線部③の「冷たい愛」とはどのようなことを意図した著者の表現であるか。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 イエスの説いた「愛」は仏教的な「無」にも通じるところがあり、存在にかかわる関係性自体を否定する抽象度の高い概念であることを強調するために「冷たい愛」という表現をした。
- 2 「存在への愛」は禅で言う「師を殺し、仏を殺し」という経験を経て会得されるものであり、その種の「愛」の根底にはある種の冷たさが潜んでいることを示すために「冷たい愛」という表現を用いた。
- 3 イエスの説いた「愛」は仏教の教えからすると人間中心性が残る不徹底なものであり、万物への愛を実現するためには仏教の教えのように人間の愛とは隔絶した冷徹さが必要であることを強調するため「冷たい愛」という表現を用いた。
- 4 イエスの説いた「愛」は、本来、個別具体的な友愛や親子の愛とは大きくへだたっており、それは仏教の「無」にも通ずる普遍性の高い純化された「愛」であることを示すために「冷たい愛」という表現を用いた。
- 5 仏教の教えはキリスト教の隣人愛よりも抽象度が高く、人間の友愛や恋愛、親子の愛とは遠くへだたっていることを強調するために「冷たい愛」という表現を用いた。

問七 傍線部④の「逆説でもあり、救いのようでもあり、悲劇のようでもある。」とはどのようなことか。その説明として最も

適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 高度に制度化されたキリスト教文化や教会組織の中心に、文化や制度そのものを相対化する生身のイエスが据えられているというのは逆説であり、それは一方で文化や制度を相対化する力が後代に引き継がれたという意味では救いであるが、他方では人間を抑圧、支配する社会制度の存続にもかかわらずきた点で悲劇的であった。

2 高度に制度化されたキリスト教文化や教会組織の中心に、愛する人・イエスが据えられていることは逆説であり、それは一方で愛を制度化させた教会を後世に伝えたという意味では救いであるが、他方ではスコラ哲学の冷たさを生み出したという点で悲劇的であった。

3 高度に制度化されたキリスト教文化や教会組織の中心に、愛する人・イエスが据えられていることは逆説であり、それは近代の抽象化する学問を生み出したという意味では救いだが、他方では冷徹なスコラ哲学を生み出したという点で悲劇的であった。

4 高度に制度化されたキリスト教文化や教会組織の中心に、文化や制度そのものを相対化する生身のイエスが据えられていることは逆説であり、それは仏教の教えのような冷たさを緩和する伝統を西洋にもたらしたという意味では救いであったが、愛の人間中心性を残してしまったという点で悲劇的であった。

5 高度に制度化されたキリスト教文化や教会組織の中心に、文化や制度そのものを相対化する生身のイエスが据えられていることは逆説であり、それは一方で愛を人びとに具体的にイメージさせるという意味では救いであるが、他方ではそれがキリスト教にたいする評価を分けてしまったという意味で悲劇的であった。

問八 本文の内容に合致するものを、つぎの1～6のうちから二つを選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 ギリシアの文化は世界を分割・分類し、そこに秩序を見いだそうとした。そうした分類や秩序化に伴う欠陥を救い出す力として西洋の社会においてキリスト教が果たした役割は大きい。
- 2 キリスト教も仏教ともに文化や社会制度への批判性・破壊性、あるいは関係性を存在の基本に置く考え方はあるものの、キリスト教の教えは仏教と違って具体的な人間の面影を消し去ることはなかった。
- 3 隣人愛をかかげるキリスト教は、キリスト教の名のもとに多くの人々を苦しめてきた歴史をもつが、これは人間中心性を脱した仏教のような宗教制度においては起き得なかった悲劇である。
- 4 心身の障害を持つ人びととのふれあいにかかわる喜びはキリスト教の隣人愛と重なるものであり、仏教の「存在への愛」は障害をもつ人への愛とはまったく無縁で冷たいものであった。
- 5 西洋近代における人権思想や個の尊厳は、キリスト教を土壌に生み出されたものであり、それは現在においても人間を尊重するための有効な武器としてキリスト教の制度化を支える力の源泉となっている。
- 6 キリスト教は文化や秩序を相対化する隣人愛の教えを中心に据えていたために、かけがえない個人を重視する人権思想を生み出す土壌となり、それはキリスト教という社会制度を無害化する装置として後代に伝えられていった。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

つい先日、とても奇妙で、とても素敵なブログを見つけた。

さすがに、個人がひっそりとやっているところなので、直接ここにURLを貼ることは控えるが、もう四年以上も続けられているそのブログは、かなり高齢のクロスドレッサー、つまり異性装者のもので、日記風の短い文章と一緒に、若い女性の服装で撮影した写真が並んでいる。

貼られているのはすべて、城跡や日本庭園など、いわゆる「名所旧跡」で、旅行中のポートレート風に撮られた写真か、もしくはどこかで撮影した自分の写真を、そうした場所に合成した写真である。

そして、ブログの記事は、そのほとんどが時事問題や身近な社会問題、あるいは芸能人の話題など、ニュース的なものに分の思うコメントを付け足したものである。過激な政治的意見などはなく、どれもオン^ア당한ものばかりだ。

時事問題、事件や事故や災害の話、身近な話題、昔飼っていたペットの思い出の記事と、名所旧跡、歴史的建造物、見晴しの良い場所、有名な建物、きれいな公園、美しいバラ園のまえで、OLや女子高生の姿で静かに微笑んで佇む^{たなず}ブログ作成者の写真とが、まったく違和感なく、そして何の説明もなく、ただ静かに並んでそこに置かれている。そして、その写真が記事のなかで一切言及されない、ということが、全体として、このブログを、なにか独特のものにしているのである。

これを見たとき、正直いって、私自身の先人^①観^{くわ}が覆^{つがえ}された。たとえば異性装者がその指向性を表現する場合、それについて言及するのが当たり前だと思っていたのだ。

よくあるいわゆる「オネエ言葉」を使っているわけでもない。異性装とはなにかついて熱く語ることもない。ただただ、ほんとうに普通の「ですます」調で、ほぼ毎日、天気やニュースや芸能のことについて書かれている。そこに、一枚か二枚、自らの写真が並べられている。文章も写真も、まるで夕^{ゆう}風^{ふう}の海のように、とてもおだやかで静かで、豊かな感受性と優しいまなざしに満ちている。

ネットのなかのごく一部で、このブログはすでに話題になっていたようだが、その異性装の写真を嘲^{あざわら}って笑うものもいるけれども、私はこのブログは、確かに全体としてとても奇妙で独特のものだが、同時にとても素敵なものだと思った。

簡単にいうと、こういうことだ。少数者というものは、いわば「ラベル」を貼られた存在である。このことについては誰もが知っていることだろう。だが、そのラベルが「貼られていない状態」を「実現」しようとすれば、どのようなかたちになるのだろうか。

このブログは、まさにこのことを実際にやってみた、とても静かで個人的でささやかな、しかし同時にとても勇気ある「実験」の記録なのである。

これを理解するためには、まず「ラベル」について理解する必要がある。

マイノリティとか少数者とか当事者とか、言い方はいろいろあるが、多くのそういう方にお会いして、何度も聞き取りをしてきた。そういう存在について考えるということは、少数派である人びとについてだけではなく、むしろ、多数者、一般市民、あるいは「普通の人びと」について考えるということでもある。

私はおおまかにいって、そういうことについていろいろと取材したり考えたりしてきたのだが、これもありふれた言い方になつてしまふのだけれども、やっぱり「普通」というものはどこにも存在しないんだな、と思うようになった。

ただこれは、よく言われるように、「一見すると普通にみえる人びとにもさまざまな事情や状況があり、そういう意味ではその人びとも普通などではなく、それぞれに特別な存在である」ということだけではない。それはそれで真実ではあるが。

多数者とは何か、一般市民とは何かということを考えていて、いつも思うのは、それが「大きな構造のなかで、その存在を指し示せない／指し示されないようになっていく」ということである。

マイノリティは、「在日コリアン」「沖縄人」「障害者」「ゲイ」であると、いつも指差され、ラベルを貼られ、名指しをされる。

A マジョリティは、同じように「日本人」^{注1}「ナイチャー」^{注2}「ヘテロ」であると指差され、ラベルを貼られ、名指しされるこ

とはない。だから、「在日コリアン」の対義語としては、^(イ)「便^イ的に「日本人」が持つてこられるけれども、そもそもこの二つは同じ平面に並んで存在しているのではない。一方には色がついている。これに対し、他方には異なる色がついているのではない。こちらには、そもそも「色というものがない」のだ。

一方に「在日コリアン」という経験^①があり、他方に「日本人」という経験があるのではない。一方に「在日コリアン」という経験^①があり、そして他方に、「そもそも民族というものについて何も経験せず、それについて考えることもない」人びとがいるのである。

そして、このことこそ、「普通である」ということなのだ。それについて何も経験せず、何も考えなくてよい人びとが、普通の人びとなのである。

学生を連れてよくミナミのニューハーフのショ^{注3}ーパブに行く。だいたいいつも、女子学生が大喜びする。ああいう空間では、むしろ女性のほうが解放感を感じるようだ。あるとき、ショ^{注3}ーの合間にお店のお姉さんが、女子学生が並んだテーブルで、あんなたち女はええな、すっぴんでTシャツ着てるだけで女やから。わたしらオカマは、これだけ化粧して飾り立てても、やつとオカマになれるだけやからな、と冗談を飛ばした。

私は、これこそ普通であるということだ、と思った。すっぴんでTシャツでも女でいることができる、ということ。

もちろん私たち男は、さらにその「どちらかの性である」という課題すら、免除されている。私たち男が思う存分^②「個人」としてふるまっているその横で、女性たちは「女でいる」。

さて、それでは、社会によって色をつけられラベルを貼られた存在が「普通になる」ということは、どのようにして可能だろうか。

実はそれこそ、さまざまな反差別運動の、ひとつの大きな目標であった。まずはじめに出てくる運動の目標は、^③ラベルを捨

て「無徴」になる、ということである。しかしこれは、自らの出自を否定して生きる、ということである。たとえば、被差別部落は、「そこで生まれた／そこに住んでいる」ということによる差別である。「では、みんなそこから出ていって、その出身であることを隠して生きれば？」ということは、まずはじめに誰でも思いつくことだ。

しかし、自分の出身を隠してずっと生きる、ということとは、それ自体でとても辛いことだし、そもそもそれ自体が、つねに「自分とは誰だろう」という問いを絶え間なく引き起こす(ウ)ケイ機になるだろう。いちど貼られたラベルを、簡単に剥がすことはできないのだ。

B、普通は、ラベルを貼られたまま、そのラベルの価値を転倒し、ラベルに誇りとプライドを抱く、というものになる。つまり、差別を乗り越える、ということは、ラベルについて「知らないふりをする」ということではなく、「ラベルとものに生きる」ということなのだ。

社会運動の話はこれぐらいにしておこう。(エ)カン心なことは、社会的に貼られたラベルを引きはがすことはとても難しい問題をいろいろと呼び起こすということである。そしてそれは、とても勇気がいることでもある。

ラベルを貼られるということがどういうことを理解するとき、ひとつの例があつて、それは、「なにかを表現しようとしたときに、そのラベルが強調される」ということがある。

たとえば、女性弁護士や女流作家のように、なにかの肩書きに伴って「女性」「女流」はよく使われるけれども、「男性」「男流」は使われない(そもそも「男流」はPCで変換されない)。女性の弁護士や政治家の話題がメディアで取り上げられるときは、かならずそれが「女性である」ということが強調されるのだ。

ここで、異性装が「通常のこと」になっている世界を想像してみよう。そこではおそらく、「異性装」という言葉すら存在しない。それは完全に当たり前前の選択肢のひとつになっている。普通に個人として日記やブログやTwitterやFacebookで文章を

書きながら、異性装の写真を同時に掲載することに、何の違和感も発生しない。

私は、個人的な思い込みかもしれないのだが、このブログは、極端な言い方をすれば、ひとつのユートピアを達成しようとする試みであるように感じた。

もし異性装というものが普通の、当たり前のことである世界に異性装者のブログがあったとすれば、それはおそらくは、時事問題や日常的な話題について淡々と書きながら異性装の写真を載せる、というものになるだろう。もちろんそれがすべてではなく、もっと非常に多様なものになるだろうが、それはすくなくとも「ひとつの姿」でありうる。

ラベルを付与されたものがほんとうに「無徴」になることは困難だ。だから、このブログも、「それについて言及しない」ということで、全体として、ちょっと他にあまりない感じにはなっている。しかしこれは、強い意志をもって「普通になろうとしたひと」の、静かな勇氣と情熱によって作られている作品なのだ。

表現する側のラベルに言及されることなく、^④純粹な表現者として表現できるようになること。これが、ラベルを貼られたものが表現するときの、理想の状況だろう。

もちろんこれは、現実の社会運動がめざすべきこととはまったく異なる。なぜかというところ、ラベルを完全に消去して忘却することは、とても難しいからだ。現実的にはやはり、ラベルを引き受け、それとともに生きていくしかない。

しかしこのブログは、この社会のなかでひとりの異性装者が試みた、ささやかな夢の実現なのだ。ここには、異性装との出合いの語りや、アイデンティティの称^オヨウ、抑圧的な社会への批判、そういうものが一切ない。彼女は誰とも、何とも闘ってはいない。そうした闘いを飛び越えて、最初からそういうしんどい闘いが存在していなかった世界を、自分だけの小さな箱庭で実現しているのである。

誰も、誰からも指をさされない、おだやかで平和な世界。自分が誰であるかを完全に忘却したまま、自由に表現できる世界。それは、私たちの社会が見る夢である。

（岸政彦『断片的なものの社会学』より。ただし原文の一部を変更した）

注1 ナイチャー 沖繩の言葉で、他の都道府県の人びとのこと。

注2 ヘテロ 異性愛者のこと。

注3 ショーパブ 飲食をしながら歌や踊りなどが楽しめる酒場のこと。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分にふさわしい漢字を含む文章を、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

1 あなたへのオン義を忘れたことはない

2 できるだけオン便に事を済ませたい

(ア) オン当

3 オン讐を越えて許し合う

4 オン暖な気候に恵まれる

5 オン念を晴らしたい一心で耐え忍ぶ

1 ギ証罪に問われる

2 社会の存続に不可欠なギ札

(イ) 便ギ的

3 兎ギに等しい作戦を立案する

4 ギ念を晴らさねばならない

5 時ギにかなった企画を立てる

(ウ) ケイ機

- 1 神のケイ示を受ける
- 2 前ケイ書を参照のこと
- 3 ケイ意に欠ける態度を非難する
- 4 ケイ約を破棄する
- 5 外国への憧ケイを抱く

(エ) カン心

- 1 ウイルス性のカン炎に感染する
- 2 退職をカン奨する
- 3 売上げのカン定が合わない
- 4 カン僚機構の腐敗を告発する
- 5 この映画のエンディングは圧カンである

(オ) 称ヨウ

- 1 ヨウ途を間違えて道具を使う
- 2 警察が自白を強ヨウする
- 3 凡ヨウな作品ばかりが展示されている
- 4 人びとのあいだに動ヨウが走った
- 5 国旗が掲ヨウされた

問二 本文中の空欄

A

と

B

に入る適切な語句を、つぎの語群1～5の中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

A 1 だから

2 ただし

3 しかし

4 まして

5 とはいえ

B 1 したがって

2 にもかかわらず

3 さらに

4 なぜなら

5 すなわち

問三

傍線部①「先入観」の内容として適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

1 ブログでは掲載した写真について詳述するのが「当たり前」である。

2 マイノリティのブログでは、身近な話題や一般的な話題は語られないのが「当たり前」である。

3 硬派な主張を訴えるブログは「だ／である」調で書くのが「当たり前」である。

4 マイノリティは自らの指向性や属性を他人に知らせないようにするのが「当たり前」である。

5 マイノリティの表現活動では、自らの指向性や属性について言及するのが「当たり前」である。

問四 傍線部②「個人」の意味として適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- 1 自らの属性をいつでも捨てることのできる存在。
- 2 他の人びとから孤立した孤独な存在。
- 3 他の人びとに依存していない独立した存在。
- 4 社会のルールに縛られることなく勝手気ままにふるまえる存在。
- 5 自らの属性を意識することなくいられる存在。

問五 傍線部③「ラベルを捨てて「無徴」になる」という言葉で言及される状態として適切なものをつぎの1～5の中から一つ

選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- 1 自らの生まれもった指向性や属性を愛することができる状態。
- 2 自らの欠点や能力不足を他の人びとによって埋め合わせてもらえる状態。
- 3 自らの指向性や属性が価値を持つものとして他の人びとから尊重される状態。
- 4 指向性や属性に関係なく他のあらゆる人びとから区別されない状態。
- 5 あらゆる個性を捨てて特徴のない人間になるという状態。

問六 傍線部④「純粋な表現者として表現できる」という言葉が指す内容として適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- 1 自分の作品を自らの属性や指向性に結びつけて解釈されないということ。
- 2 世間からの抑圧を受けることなく、自分が好きなことを自由に表現できるということ。
- 3 自分の内心を偽ることなく、思ったままを表現できるということ。
- 4 人気が出るかどうかを気にすることなく、自分の表現したいことを表現できるということ。
- 5 作者がいかなる人物なのかを考慮したうえで、その作品の価値が判断されるということ。

問七 本文の内容に合致するものをつぎの1～7の中から二つ選び、それらの記号を解答欄にマークせよ。

- 1 実際に差別が存在する以上、マイノリティは「普通」であることを断念して、自分たちの権利の獲得を目指すべきである。
- 2 マジョリティとは、自らの属性や指向性と向き合うことなく生きていける存在である。
- 3 差別に直面した人びとが心の安定を得るための確実な方法は、自らの属性や指向性を人目に触れないようにすることである。
- 4 ラベルを貼られて生きざるをえなくなることを避けるために、差別の克服を目指す社会運動はマイノリティの人びとが「無徴」で生きられる状態の実現を目指すべきである。
- 5 「男流」という言葉が用いられないのは、男性が男性として生きねばならないということが当然だからである。
- 6 「誰も、誰からも指をさされない、おだやかで平和な世界」では、人は胸を張って自らの属性や指向性を表明することになるだろう。
- 7 差別が存在する世界では、自らに貼られるラベルにあえて言及しないことも強い意思の現れとして解釈できる。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

保線区を流れる幾筋もの線路の川には、外から入ってくる車両を限られた領域に導くための転轍部分^{てんてつ}が、ところどころに隠されている。いや、べつに誰かから隠しているわけではなくて、そのように見えるだけのことなのだ。実際問題として転轍機は、切り換えが無事に終わり、^(あ)列車の進行方向がとつぜん変わるまでその存在を明らかにしてくれないものだ。こちらに来るぞと身構えていると、列車はみずからの意思で選びとつたかのような確固たる身ごなしで、それまでとはちがう方向に、くいと頭を向ける。

左からの進路を右に、あるいは右からの進路を左に。現在では、古い映画に出てくるようなレバーを動かす手動式ではなく^(ア)完璧な電子制御で稼働しているのだろうけれど、いずれにしても転轍機はじつに不思議な装置で、そこに存在しているだけでは眠っているに等しく、かといって、作動したらしたで、そのあとは次の切り換えがおこなわれるまで黒子に徹^(イ)しなければならぬ。列車が方角を転換する瞬間にしか役立たないとなれば、それがどんな素材でつくられていようと、転轍機はモノではなく、あくまで **A** ではないのである。つまり、電気回路のスイッチとおなじで、役に立たないという状態がありえないのだ。ゼロであっても、オフになつていても、流れを中断させるという意味ではみごとに役に立っており、結局、オンの場合となら変わりがなくことになる。

そこまではしかし、かつて身近にあつた鉄道の保線区やオーディオアンプの回路図などを眺めていれば、なんとかたどりつきうる概念だろう。だからこそ、スイッチが「時間に対し特別の関係を持つ」こと、そして物体という概念よりも **B** という概念に関わるもの^{注1}だと明確に述べたのち、それを生物の感覚器官の役割と結びつけたグレゴリー・ペイトソンの『精神と自然』の一節に出会つたときには、なるほど、と深くため息をついたのだつた。

命を支え、存続させていく過程で、いまなにか必要なのか。分泌^(ウ)すべき物質はなんなのか。それを私たちに知らせる装置がある。ご飯を食べなさい、散歩に出なさい、原稿を書きなさい、猫と遊びなさい、といった日常的な命令系統とはべつの、も

つと複雑な網状組織のなかで作動する切り換え装置があるはずで、それをじつに簡潔に説明するベイトソンの思考回路じたいに、身体はどこかに眠っていたスイッチをオンにもらった気がしたのだ。

無から有は生じない。なにかが生まれるには、必ず出発点となる材料がなければならぬ。あたりまえの話だ。ところが「情報と組織形成の世界」では、その真理が部分的に否定される、とベイトソンは言う。なぜなら、情報となる出来事の欠如そのものが、ゼロとして肯定的に解釈され、重要なメッセージになりうるからである。

ダニの幼虫は木を登り、先の小枝にまよって待機する。そこに汗の臭いが漂ってくると枝から落ち、うまく行けば哺乳動物の上にとまる。何週間たっても汗の臭いがしてこない場合はどうなるのか。この場合も、やはり落ちて、今度は別の木に登るのである。(佐藤良明訳)

生きていくための第一歩として、ダニは樹木の上から哺乳類にダイビングする。そのための合図を、彼は状況に応じて読み解く。汗の臭いがしてこないというゼロの情報、すなわち無の状態が、ここでは再起動をうながす貴重な合図になっており、そのような読みを可能にするのはダニ自身の力なのである。ゼロに意味を見いだす文脈が彼の身体に組み込まれていなければ、その先、なにも生起しない。不在の哺乳類がゼロのメッセージを発しているのではなく、それもメッセージだと解釈しうるコンテキストをダニ自身が有していること。それこそが種を存続させ、進化させていくための、特別に重要な「技量」なのだ。

ダニは、こうした生きるための文脈のなかで発動する転換機やスイッチに似た感覚器官を有している。このくだりを読んだとき漏れ出た嘆息は、そうしたゼロのメッセージの解説を、彼らよりも進化しているはずの人間たるこちらのほうがまともに実践できていないのではないか、という忸怩たる思いに発したものだ。

このところの暮らしを振り返ってみると、あれがないこれがないとあわてふためくばかりで、ゼロの状態から肯定的な意味をくみ取り得たためしがない。木の枝から落ちたまま、次に登るべき木を見つけられずにいるとしか言いようがないのだ。保

線区の線路を眺めながら列車の方向転換をたのしんでいた少年時代から、人間として、というより生物として、私はいくらかでも進化してきたのだろうか。じつに疑わしいことである。

(堀江敏幸『正弦曲線』より。ただし原文の一部を変更した)

注1 グレゴリー・ペイトソン イギリス出身でアメリカ合衆国で活躍した文化人類学・精神医学の研究者

問一 傍線部(ア)～(エ)の漢字と、同じ漢字を含んでいる語を、つぎの各群の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 断崖ぜつべきを登る

2 たまの汗をかく

(ア) 完璧

3 ふたりがそうへきをなしている

4 おうへいな態度

5 けつべきな性格

1 部隊がてつたいする

2 とうてつした理論

(イ) 徹し

3 しょうどうを抑えられない

4 人事でこうてつされる

5 きんこうを保つ

問二 文中の空欄

A あくまで

A

と

B

に入る最もふさわしい語を、それぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 運動

2 機能

3 精神

4 デザイン

5 意思

6 道具

B 物体という概念よりも

B

という概念に関わるもの

1 意味

2 生命

3 空間

4 身体

5 エネルギー

6 変化

(ウ) 分泌

1 りゅうとうだびに終わる

2 びどうだにしない

3 ひにようきかにかかる

4 職をひめんする

5 ひぎを執り行う

(エ) 哺乳

1 親鳥が小鳥をほいくする

2 燃料をほきゆうする

3 ほせきが敷かれている

4 容疑者をほそくする

5 つつうらうらに行き渡る

問三 傍線部(あ)に、転轍機は「列車の進行方向がとつぜん変わるまでその存在を明らかにしてくれない」とあるが、それはこの文章全体の中で、転轍機のもののようなあり方を指すものとして言われているか。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 転轍機は、あたかも列車がみずからの意思で方向転換したかのように見せている。
- 2 転轍機は、黒子のように表舞台には現れず、陰で人々の活動を支えている。
- 3 転轍機は、人目につかない場所に設置されていて、密かに情報を送りこんでいる。
- 4 転轍機は、自力では動かず、列車のエネルギーを利用してはじめて作動することができる。
- 5 転轍機は、列車の方向を変えろという働きをしてはじめてそこに存在する。

問四 傍線部(い)の「その真理が部分的に否定される」とは、この文章の中ではどのようなことを指しているか。最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 生物には無の状態から有意義なものを生み出す創造力が生得的に備わっている。
- 2 生物は有意義な情報が何もないということを契機として行動を起こすことがある。
- 3 生物は有意義な情報が何もない状態に最適な生存の条件を見いだすことがある。
- 4 生物の進化にとって最適な条件は常に一定の形で決まっているわけではない。
- 5 生物をとりまく情報と組織の複雑性が高まると、どのような情報が有意義であるのかが不確定になる。

問五

この文章を構成している二つの話題、「転轍機」の話と「ダニ」の話は、相互にどのような関係に置かれているか。その説明として最も適切なものをつぎの1〜4の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 列車の進行方向を巧みに切り換えていく転轍機のあり方が、状況に応じて自在に方向を変えていくダニの生き方の喩えとして用いられている。
- 2 列車が方向を変えたことではじめて存在を明らかにする転轍機のあり方が、ダニの行動をうながすメッセージのあり方の喩えとして用いられている。
- 3 意味のある情報を送ることによって列車の進行方向を切り換えていく転轍機のあり方が、無の状態から行動を起こすダニの生き方と対比的に用いられている。
- 4 機械的に制御されて機能する転轍機のあり方が、無の状態から創造的な進化を呼び起こすダニの行動と対比的に用いられている。

問六

傍線部(う)の「木の枝から落ちたまま、次に登るべき木を見つけれずにいる」とはどのような状態の喩えか。その説明として最も適切なものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 何が有意な情報であるのかを判断する「技量」を身につけていない未熟な状態。
- 2 列車の方向転換を見て楽しんでだけで、自分では何ひとつ変えることができない少年のような状態。
- 3 数多くの情報に翻弄されて、次に選ぶべき行動を選択しきれない優柔不断な状態。
- 4 明示的なメッセージが与えられていないことを、次の行動を起こすための合図として読み取ることができない状態。
- 5 過去の失敗に学んで、新しい行動パターンを獲得し、進化・成長していくことができない状態。

